

ゼリオニイの社會生理學

銅 直 勇

かのガリレイが眞理は自然そのものゝ中に含まるゝこと、吾人は唯自然の忠實なる觀察によつてのみ之に到達し得るものであり、又自然は實に數字の記號に依て記されたる書物であるとして、經驗の感覺的性質的要素を凡て客觀的數量的終極要素に還元し、其の相互の函數的關係を法則として定立し更に進んで其法則の結合によつて逆に經驗的事實の成立を理解すべき自然科學的方法を創始して以來、遂に自然現象のみならず所謂精神現象の研究に於いても如何にしてこれを自然科學的方法の上に基礎つけるかにつき既に長き努力が試みられてゐるのである。

社會學に於いても其の出發の第一歩は亦實に此の方針を以つてしたのであつた。即ち彼の社會學の創始者コントに於いては其の實證哲學の目的はあらゆる觀察し得る現象の自然法則を發見することである。而して一切の現象は唯無機體の現象 *Les phénomènes des corps bruts* と有機體の現象 *Les phénomènes des corps organisés* の二種

に分れ社會學は初め社會物理學 *physique sociale* の名を以つて呼ばれ生物學と共に有機體の現象を研究する有機物理學の二部門を形成して居るのである。彼が如何に物理學の影響を受けて居たかは尙彼の社會學の二部門である社會靜學と社會動學の名稱によつても知ることが出来るが然し彼の此等の名稱も多くは比喩的に止り彼は社會科學に數學を應用することを以つて數學以外に確實なるものは無いといふ形而上學的偏見に基くものであると反對し、且つ社會學と生理學との關係に於いても社會現象は一面確に生理學的法則の影響を受くることを認めつゝも他面亦社會學を生理學の一附屬物と見る生理學者の意見に反對し社會現象は生理現象と同性質のものであるが然し決してこれを同視することは出来ないとした。(Comte, Cours de philosophie Positive, Tome I. 3e et 3e Leçon.) エルウッドはコントが「實證政治學」に於いて社會學を以つて眞の精神科學となすことが出来るといつて居ることを舉げ人間社會が本質的には精神的性質のものであることに就いて彼ほど強硬に主張したものは無いとさへいつて居る。Elwood, Objectivism in Sociology, American Journal of Sociology, Vol. 22, No. 3.

爾來スペンサーを経て自然科學の方法は一層徹底して適用せられ社會學は此方面に向つて急速なる發達を見るに至つた。然しスペンサー及びリ、エンフェルドシエ

ツフレ、ヅ・グレイフの如き人々に於ても其思想は全體として自然論的なるに拘らず猶心理的分子を十分に認めて居る。否輓近社會學の主潮は社會現象を物理現象生物現象と同視することの謬見なるを認め社會現象は根本的に心理的なる現象であるとして専ら其の差異性を高調してゐるのである。然しながら社會現象がかくの如き性質を有する限りこの定立する所の法則なるものは決して嚴密なる意味での自然法則と同等なる確實性を有するものではないと考へる學者も決して絶無ではないのである。(Ward, Pure Sociology, 1907, p. 47.) 顧ふに從來の社會的法則なるものは多く系列的法則であつて眞に時處を離れて無限に繰返す普遍的社會法則を求めんとせる研究は極めて稀であつた。社會法則がその確實性を疑はるゝも一にそが系列的法則であつた爲めであることを發見し且確實にかゝる無限に繰返す普遍的法則が定立せられたる時、而して又自然法則の本質をその無限なる反覆性に求め其の計量的性質を必然の要件に非すと考ふる限り社會學も亦確實なる自然科學といふことが出來よう。然しながら飽迄もその定立する所の法則が客觀的數量的關係の上に立つことを以て自然科學構成の一必須條件であると規定するに於いては、社會學の研究は唯其の並行する物質現象身體現象に關係せしむることによつてのみ可能となるべく従つ

て此見地よりする社會現象の研究は生理學若しくは物理的社會學となるの外なきに至るであらう。唯かくの如き方法によつて社會現象の真相が果して幾何闡明し得られるかは別個の問題として残るとしてもそが一の科學的方針としてそれ自身の範圍内に於て承認し得られることは否むことは出来ない。今次に述べんとするゼリオニイの社會生理學の如き即ち其の一例である。

社會學に於いてこの徹底的見地に立つたものは既に無いではない。彼の數理經濟學の發達の影響を受け社會學をも一の計量的科學となさんとする人々、特にバルト、及びウィニアルスキの如きこれである。又ソルヴェイ派の社會學を最もよく代表するワクスウェラーの如き亦比較的嚴密なる自然科學的態度をとるものである。ワクスウェラーが社會學を定義して「社會學とは男女雌雄の別なく凡て同種生物の個體間に於ける相互刺戟より生ずる反應現象の生理學である。」(Maxwell, Esquisse d'une) といつてゐる點に於てゼリオニイ氏の社會生理學はワクスウェラー氏の社會學と略同一の見地に立つものである。

抑々社會生理學 *Sozialphysiologie*. *Physique sociale* の名は社會學に於いて決して珍しい名稱ではない。既にコントは其の社會靜學社會動學を夫々解剖學生理學に擬し

た。爾來社會有機體説の行はるゝと共にシエツフレ、デュルケム、ワード其他の社會學者も亦社會生理學なる名稱を用ひてゐる。然し此等の場合に於いては多く社會的機能を表す比喩的用例たるに止り社會若しくは社會現象を嚴密なる意味に於て生理學的に研究せんとするものではない。今ゼリオニイの社會生理學を見るにそは猶一の主張又は企畫の概要を述べてゐるに過ぎないけれども社會學が嚴密なる意味での自然科學たらんが爲めにはその心理的方面を排除する社會生理學とならざるを得ないことを方法的に又認識論的考察をも加へて氏自身の立場から最も明快に論述してゐる點に於てワックスウエラーの研究より更に一步を進めてゐるのである。彼の社會有機體觀の如きこれを純一に科學的に徹底せしむれば必ずや氏の社會生理學の如きものとならざるを得ないであらう。

氏はペトログラード大學生理學講師で彼のバヴロフ教授の生理學教室の一人として既に其の專攻の研究に於て知名の學者である。心理現象及社會現象を客觀的に研究せんとする Functionalism. Behaviorism. の主張と共に心理現象の主觀的解釋を輕視して心理學を生理學の一部門と見んとするバヴロフの反射生理學からその一社會學的適用が主張されるのも亦其の當然の歸結であらう。次に先づ氏の社會生

理學の主張及企畫*の概略を述べよう。

* Zelony, Dr. G. P. Über die künftige Sozialphysiologie. Arch. f. Rassen- u. Gesellschafts-Biologie. IX. 1912.

氏のいふ所によると自然科学は現象の科學である。自然科学者の研究對象は現象であつて決して決して概念では無い。吾人は現象の分析によつて或る概念を抽出しかくして得たる概念を更に他の研究に用ふることが出来る。然し自然科学的研究の對象は常に現象である。科學の職分は現象の記載新なる現象の發見であると共に又現象相互間の合法的關係を明にするにある。多くの社會學者は理論としては此見地を是認してゐるけれども然し其の研究の實際に於いては必ずしも之を徹底してゐないのである。今かくの如き矛盾を敢てする原因如何といふに其の主なる一は現象の概念を明確に決定してゐないことである。

此の概念を明確にせんが爲めに假りに今一人が他の一人に對しステッキを振り上げ怒れる顔をもつて威嚇を試みてゐるといふ時、眞に吾人の前に現れたる現象といふべきは唯その人がステッキを手にもつてふり上げ、且つその顔つきに變化があつたといふに過ぎない。その人が怒つて威嚇的態度をしてゐるといふのは唯ありのま

この現象に對し自己が加へたる他人の心理状態の説明である。それは現象即ち事實として考ふることの出来ないもの従つて自然科学の對象となることの出来ないものである。自己以外の人の意識は如何なる場合に於いてもこれを知覺することの出来ないものであるが故に自然科学はこれを問題外とすべきであり、且又これを超經驗的假定とすることも出来ない。然るに多くの社會學者は社會を有心物の總體と見ながらこれをば又自然現象であると見、自然科学によつて研究せらるゝ眞の自然現象と混同し、結婚、犯罪、家族等の如きものをも自然現象の中に入れてゐる。

然し犯罪は決して自然現象と見做すべきでは無い。今一人あつて他の一人の體にナイフを突刺したとせよ。これ疑もなく吾人が吾人の感官によつて知覺することの出来る現象である。然し此場合一の「犯罪」なるものが一現象として吾人の眼前に現在してゐるといふことは決して出来ないのである。それは吾人が自ら加へたる一の説明である。又家族なる概念に於いてもそれは人間の心理状態に就いての表象なくして考ふべからざることであるが故にかくの如き概念は自然科学的社會學中に採用すべからざるものである。只犯罪の場合に於いては一人が他の一人の身體に傷害を與へたといふこと、又家族の場合に於ては人と人との間に特別なる生理的

相互關係があるといふこと、唯これ等の現象のみが自然科学的研究の對象となり得るのである。概念の用は只その概念に結びつける一群の現象に注意せしむる一の案内者の役をなすに止り吾人がこれ等現象の研究に着手する時は最早何の必要もないのである。

吾人がかく述べ來る時吾人はこれに就いて次の如き反駁が起され得ることを豫期する。即ちそれは他人の心理状態は自然科学者に對して現象と見做さるゝことは出來ないとしてもこれを用ゆる時は現象の説明の支助となることが出來るといふことである。然しこの反對説は正當でない。凡ての自然科学は何れの外的現象も或る他の外的現象の中にその原因を有すといふ原則の上に立てられてゐる。然しこの場合の「原因」なる語は「條件」の意味に解しなければならぬ。説明するといふことは自然科学に於いては一の現象と他の現象との合法的關係を決定することを意味するのである。自然科学者の問題とする所は或る現象が如何にして、*wie* 行はるかといふことであつて何故に、*warum* それが起るかといふことでは無い。換言すれば自然科学者の探求する所は現象の目に見えぬ内的原因でなくして只現象の據つて以つて行はるゝ法則である。然るに前述の如く他人の心理状態は吾人の知

覺することの出来ないものであるが故に有機體の生理的現象とその心理的狀態とを結合することは何等科學的説明とはならないのである。吾人が初めの例に於いて手をふり上げたこと、神經系統に於ける生理的過程及其有機體に對する生理的影響とを結びつける時吾人は始めて完全なる自然科學的説明を與へたのである。

然るにこれに對し自然科學は心理現象をも研究對象とし従つて自然科學的方法は人間の心理狀態に關係することを十分認容するものであるといふ反對説が起り得る。——吾人自身は個人心理學は自然科學的方法の他の要求、即ち質の問題を量に還元することを満足せしむることが不可能であるが故にこれに對し反對の意見をもちてゐるのであるが今措いてこれを問はない。——然し此場合自然科學者は唯自己に對して一の現象である所のもの即ち彼自身の心理狀態の一要素を論ずることは出来るが他人の心理狀態を論ずることは出来ない。吾人は自然科學者に對し研究者それ自身の體驗が表現し又は表現し得る所のもの、みに満足することを許す所の此の見地を *wissenschaftlicher Egozentrismus* 或は寧ろ *wissenschaftlicher Solipsismus* と呼ばんとするものである。

次に尙下の如き反對説が起り得る。即ち自然科學は原子説電子説の如き形而上

學的假説を利用しこれによつて大なる進歩をしてゐるではないかといふことである。従つて吾人は人間を研究する場合その心理状態を一の形而上學的假説と考ふることが出来るかも知れぬ。然しこの假説は正當でない。自然科学に於ける形而上學的假説は現象を歸納的に研究しその結果から抽象して得たものである。吾人にして若し人間の生理的方面を自然科学的に分析したとしても吾人はこれによつて如何なる概念をも心理状態以上にまで高めることは出来ないであらう。吾人は物理化學によつて物理現象を自然科学的に分析する時、原子或は電子の如き概念を用ひざるを得ないことを知るのである。これ等概念は生理學に效用を與へ生理學の進歩は實にこの前途ある物理化學の進歩に俟つものである。

氏はかくの如く社會生理學の對象及其の方法論の特質を明にし、更にこの基礎建設の企畫を述べていふ。——即ち上述の所から如何なる結果を生じようとも吾人は精神物理的有機體としての人間の觀念から全然脱却し唯人間を有機體と觀念して精神状態を無視しなければならぬ。

今地球を見渡すに吾人はその表面に一部類の變化を注意することが出来る。即

ち無機的、自然相互の關係より起る變化、或は生きたる有機體と無生の自然物との間に生ずる變化、或は有機體相互の間に生ずる變化の如き種々の變化がある。而して就中最も重大なる變化は最も複雑なる有機體即ち人間有機體より生ずるものである。然し今物理化學的見地から見る時はこれ等變化の間に根本的差別はなく何れも同様に力の保存律の支配を受けて居るのである。吾人は此等有機體と關係を有する現象の中から或種のもの——即ち人間の相互關係(生理學的なる)だけをとり放ちこれを以つて一の特殊なる科學の對象となし此新科學を「生理學的社會學」或は「社會生理學」と呼ばんとするものである。同様にして又他の動物の相互關係を研究すると相互關係を有するのみでなくその周圍の自然とも相互關係をもつてゐるが故に社會生理學は絶えず動物有機體の相互關係の上に及す無生の自然或は他種の有機體の影響に注意しなければならぬ。然る時はこれを生理的社會學の範圍中に入すべきか將又別個の一特殊科學の對象とすべきかの問題が起つて來る。

扱て社會生理學の對象及特質を明にせんと欲すれば第一に先づ有機體の關係の分析から始めなければならぬ。今高等動物とその環境との複雑なる關係を分つて

次の二種とすることが出来る。即ち一は外的作用が感官に與へる影響の結果として神経系統を通じ反射的に起る動物とその周圍の自然との相互作用で、二は非反射的影響でこれは特別に神経系統によらないもの例へば榮養の如きこれである。此二種の相互作用は互に影響しあふものであるが人間の相互關係は主として第一の作用によつて決定せらるゝものであるが故に今吾人にとつて最も要點となす所は反射作用とは何かといふことである。吾人の意味する反射作用とは有機體が刺激に對して起す反應で刺激が求心的に神経中樞に傳り又遠心的にある感官に達するによるのである。然るに一般の人々のみならず専門の學者でも反射作用をば唯無意識的に又不氣隨的に生ずる有機體の反應のみに限りこれと他の「精神的性質」の反應と區別してゐる。成程事實としては此等の反應は其原因 *causa occulta* の意味での) を精神過程の中に有することもあり得よう。然し生理學者にとつては其原因(自然科學の意味での)は神経系統の一定の物質的過程の中に存するのである。換言すれば生理學者に對しては此反應は反射作用であり心理的生理學者にとつては精神現象に隨伴する反射作用である。今假りに精神狀態が神經過程を支配するといふことを是認してもこれによつて生理學者の職分に於いて何變變動を生じない。生理現

象の決定論的研究を本領とする生理學者の職分は常にかゝる根本的動因に無關係である。この故に生理學者は唯單なる「反射作用」なるものを認めるのみで「心理的」反應或は「心理的」反射作用なるものを認める必要はない。最近に至るまで物理現象、特に生理現象の原因を物理現象、精神現象でなく、そのものゝ中に求めんとする自然科学的方法の要求は常に嚴密に遵守されてゐなかつた。自然科学者はこの根本原則を嚴守しなければならぬといふ要求は十九世紀の末 Dextrin, Neul, Bethé 及其他の生理學者によつて主張されたのである。而かも哲學者は生理學者よりも餘程早く其の生理學的見地を正當に決定したことを特に注意しなければならぬ。生理學者は明に彼の哲學者にして生理學者であつたデカルトの觀念を更に發展したのである。吾人は既に彼のランゲの唯物論史中に反射作用の生理學的分析を發見するのであるが、然し余の知れる限りに於ては人間行動の最も精確なる代表的生理學的分析は Wedensky^{*} の優れたる論文中に含まれてゐる。

* A. J. Wedensky. Über die Grenzen und die Kennzeichen der Baseelung. Journal d. Minist. d. Volksauführung. Russisch, 1892.
又反應に就いての生理學者の見解は左の著に批判してある。

Zellony. Material zur Frage über die Reaction des Hirnlaus auf Gehörreize. St. Petersburg, 1907.

然し謂ふ所の反應なるものは甚だ不定的のものでその合法則性を理解することが困難であると考へられ近時に至るまで此等動物の反應に就いて何等組織的なる自然科学的研究をしたものが無かつたのである。而して始めてこれに著手したのは Pavlov 教授及びその門下の諸學者で、反應を生理學的に分析し生理學中に條件的反射 *bedingter Reflex* なる自然科学的概念を導き入れたのである。

バゾロフは反射作用を條件的と無條件的との二に分ける。例へば眼が強い光を受けると瞳孔が小さくなる、又皮膚を烈しく刺戟すると種々なる筋肉の收縮即ち運動が起る。口腔内に或る酸性の物又は粉末状のものを入れると直ちに唾液の分泌を始める。かゝる反射作用は凡ての動物に存在し又これが生起には何等特別の條件を要しない。換言すれば任意の固體に或る刺戟を與へると如何なる場合に於ても一の完全に定つた反應を起す。かくの如きものを無條件反射 *unbedingter Reflex* といふのである*。

* J. P. Pawlow. *Experimentelle Psychologie und Psychopathologie an Tieren*. *Mitteil. der Kaiserl. Militär-med. Akademie*. Russisch. 1903.

Paditto—: *The Lancet*, 1906.

然るに今或る犬に菓子をやする場合或る犬は單にその菓子を小さくする音を聞いただけで既に唾液を分泌するが然し他の犬はしない。或犬は馳けて來るが他の犬は來ない。然らば何故に或る刺戟が或る犬には一定の反射作用を起さしめ他の動物には然らざるか。バヅロフ及其派の學者の研究によれば或個體に刺戟を與へて何等定つた反射作用の無い場合に於いても、無條件的反射を生せしむる他の刺戟をこれと同時に或は殆んど同時に與へたる後に於いては其の同伴の無條件的刺戟を除去して單に前の刺戟だけを與へてもこれと同様の反射作用を生ずるのである。例へば菓子を小さく崩す音を犬に聞かせると同時にこれを犬の口中に入れてやつた後に於いては唯その菓子を崩す音だけで犬は唾液の分泌と運動感情とを惹起す。斯の如く無條件的反射との結合に依て生ずる反射を條件反射と名けるのである。

余はかくの如き無條件的反射との結合でなしに條件的刺戟と同伴して或る刺戟を與へたる場合にもその刺戟に對して猶一の反射が生ずることを明證した^{*1)}。例へば唯の音だけでは何等の反應をも生じなかつたに更にその音と菓子を崩す音條件的反射を伴ふ²⁾とを同伴して與ふる後に於いては單に前者だけで多少其度は弱いけれども後者と同様の反射作用を起すのである。條件的反射は餘り恒定的のもので

は無い。即ち此種の反射に於いては第二の刺戟物なしに第一の刺戟物のみをくり返して與へると遂には何等の反射作用をも起さなくなる。消失性は條件的反射の離るべからざる特性である。^{＊つ}

* 1. Zeleny, Archives des Sciences biologiques, 1909.

* 2. Pawloff, The Lancet.

meiner Abhandlung in „Année psychologique.“ 1907.

今次の如き試をして見る。即ち數日間犬にビスケットを崩す音をきかせ其中數度は其音をさせると共にこれを其犬に食べさせ他の場合に於ては只犬の體をかいてやるに止めて見る。すると最初は犬をかいてやつても(軽く)其のビスケットを崩す音に對する反射の上に何等の影響をも及さない。然るにやがて犬をかいてやつたゞけでビスケットを崩す音をきいたと同様の反射作用を起すやうになる。然るに更に更へてはビスケットの音をさして犬の體をかいてやつても最早これに對して反射作用を起さなくなる。生理學的にいへば犬の體をかいてやることかビスケットの音に對する條件的反射を制止するのである。而してその刺戟物をバヴロフ教授は條件的制止物 *bedingtes Hemmungsmittel* と稱する。

余の信する所によれば高等動物の環境に對する反應の大部分は此の條件反射と稱するものであると斷言しても決して誇張ではない。吾人が日常「Frieden」、「Gewohnheit」と稱してゐる所のものは凡て條件的反射に基くものである。蓋しこれ等のものは前述のビスケットの音の例の如く元素的のものでなく多數の條件反射及無條件的制止過程との結合によつて成れるものに外ならぬ。即ち吾人の凡ての反應凡ての行動(眞の生理的意義で)が客觀的生理學的に考察することが出來るとすれば有機體の聚合としての又有有機體の社會としての外的生活活動が理解し得られないといふ根據は何處にも無い。

然しかく述べたゞけでは條件的反射と稱するも「慣習」「行爲」と稱するも事實そのものに於て何等の變りは無いかといふかも知れぬ。然し相違は説明の方法にある。科學に於いて或る現象を説明するといふことは其の現象と他の現象との合法則性を決定することをいふのであることは既に述べた通りである。吾人は今述べたる事實をその精神状態との關係に於いて述べることは出來ない。何となれば此等の事實は我等自身のもとは別であるが吾人に對する現象ではないからである。吾人は唯上來の考究を基として次の如くいひ得る、曰く神經系統の過程との結

合である。

然しバヴロフ説が現れる以前に於いては反射的なる唾液分泌も猶「心理的」唾液分泌と考へ其の原因を運動神經系統中に求めた許りでなく尙精神状態の中にも求めたのである。余は今特に唾液反射の例のみを述べたが然しこれと運動反射即ち筋肉反射との間には何等本質的相違はないのである。人間の行動の多數は *motorische Reflexe* を考へるべきが出来る。

かく考ふる時、社會生理學は即ち單一なる有機體の生理學、殊に有機體が外界に對する反應の法則を研究する所の生理學——これを *aisssere Psychologie* といふことも出来る——に依存するものである。然し動物が外界に對する反應の法則は甚だ複雑であるが故に生理學より特に有機體聚合の場合に起る反射を別個の研究として分離するが正當であるやうに思ふ。今その研究の職分を擧ぐれば——

一、多數或は小數の個體間の反射的相互作用の法則を明にすること。

二、同種有機體が相聚る場合其中の個々の個體がその環境に對する反應を研究するべき。

三、個體の聚合が一全體としてなす反應の法則を明にすること等である。

而して右の研究は集團生理學 *Kollegive Physiologie* と稱すべきでこれを社會學といふは正當でない。然らば生理學的社會學或は社會生理學 *Physiologische Soziologie* od. *Soziophysilogie* なる科學の主要職分は何かといふにそれは番に人間の相互作用の據り行はるゝ法則を明にする許りでなく更に進んで其法則の結果としての人間の相互作用即ち個々の都市生活、民族生活、或は全人類の生活を包括するあらゆる場合の人間相互關係を精確に記述するにある。即ち生理學個人生理學並に集團生理學は物理學の如きもので社會生理學は氣象學の如き關係をもつ。後者は前者の法則によつて説明されるものであるが然し生理學又は物理學の知識そのまゝが直に社會生理學又は氣象學の知識となることは出來ぬ。又個人生理學は個人心理學に、集團生理學は集團心理學に、生理學的社會學は心理學的社會學に對當せしむることが出来る。

更に進んで社會生理學の目的の特性を一層具體的に述べよう。吾人は前に條件反射説を述べたる所によつてその反射を起す(所謂條件的)刺戟が同種の動物に於ても種々相異があり得ることを知つた。又一の動物に於ても刺戟は絶えず變化する。故に社會生理學者は與へられたる一の人類團體一民族に於て如何なる條件的刺戟

及條件的禁止物が存在するかを決定することを以つてその職分とすることが出来る。加之其民族に於てその條件的刺戟或は禁止物が如何なる範圍まで行き及んでゐるかといふとも研究され得る。民族の風俗習慣がその生理學的對應物として一定の條件的刺戟或は禁止物を有することは殆んど疑ない。又人類及一般動物界を觀るに一個體或は種族の生命維持の目的に適へる新なる對象を作らんが爲めにその環境に本質的變化を起さしむる如き反應又は反射が存在してゐる。此等凡ての自然の變化は神經系統の運動の結果であることは疑ひないが、かゝる人間の神經運動を支配する法則を心理學的説明を用ひずして明にするは生理學的職分であり、周圍の自然を變化せしむる(運河、トンネル等の如き)或る民族の神經過程の精確なる記述をなすが生理學的社會學の職分となる。之れと相並んで各個體間の相互關係の種々なる特性並に反射の種々なる特性の記述も亦その職分中に入る。生理學的社會學は又自然淘汰や生存競争といふことも注意しなければならぬであらう。然し社會生理學的對象を精確に述ぶることは此の短い論文の許す所でなく又今日の實情が之を許さぬ。何となれば社會生理學は反射生理學即ち神經中樞の生理學が十分發達したる曉に於いて始めて可能であるからである。

蓋し複雑なる現象の研究は堅固なる經驗の基礎の上に立ち單純なる現象の研究を本として始めてこれを理解し得る。これ生理學が先づ動物の實驗をなす所以である。同様にして人間の社會生理學も亦各種動物の社會學的現象の差異を研究する比較社會生理學の研究と相俟たなければならぬ。又病理學的社會生理學統計的方法も必要である。然し統計的方法は今日あるが如き形式ではいけない。即ち特に科學的特質を具へたる事實に限らなければならぬ。この意味に於いて犯罪統計の如きは無用である。又生理的社會學に於ては人間と其他の自然との相互關係の研究が必要である。従て生理學の外、氣象學、地質學、其他天文學及天體物理學等の如きも補助學としなければならぬ。

然らば社會生理學は眞の社會學と如何なる關係を有するか。然しこれに對して又社會學とは何ぞやといふことが問題となる。或は社會學は社會現象を研究するものであるとし、或は又社會學は人間の相互作用を研究するものであるといふ。然し彼のソルヴェイの觀念を更に發展せしめたるワックスウェラーの社會學觀念は余の觀念に最も近きことを大に満足とするものである。然し此等の人々は有機體の反應現象を心理的過程に歸せんとするに反し余はこれを純然たる生理學的過程のもの

のとする點に於て大なる徑庭がある。ワックスウエラーの社會學も猶精神生理學といふ方が適當である。吾人は自然科學的方法の上に立つ限り唯吾人の知覺し得る部分即ち生理學的部分のみを注意しなければならぬ。然し自然科學の要求をすてゝ人間の精神的方面をとることも出来る。即ち吾人の日常生活に於て吾人は外部的なる觀察によつて得たる所のものと自己觀察とを一定の方法によつて結合して他人の精神狀態の表象を作つてゐるのであるがこの方法を社會に適用して心理學的社會學又は集團心理學を作ることが出来る。然しかくの如き學問を自然科學の中に入れることは出来ない。(文化科學としての社會學或は歴史哲學としての社會學は吾人は今こゝに述べたる觀念と大分軒輊のあるものであるから、吾人は今措いて之を論じない。)又かゝる科學が如何にして建設せしめらるべきかの決定は自然科學者たる吾人の關知せざる所である。然し複雑なる人間相互作用を精神狀態によつて説明する如きは殆んど不可能である。且主觀的方法についても幾多の難點がある。即ち觀察そのものが時に變化するものであるから精神現象は決して其の眞の形に於て觀察されることは出来ないこと、又精神現象も非常に變化し易いものであるからこれを一々精確に研究することは出来ないこと、又科學はものゝ數量

及重量を正確に測定するものであるに拘らず精神現象は(少くとも今日までは測定することの出来ないものであること等これである。然し又心理學的社會學が如何に必要なものとしても客觀的なる社會現象は唯經驗に於いてのみ與へられ吾人はこれを基とし自己觀察の助を假りて精神現象を類推するに外ならぬが故に心理學的社會學は只生理學的社會學を俟つて始めて發達し得るのである。且人間の複雑なる心理的相互關係はこれに對する生理學的對應物を有するものであるが故に此の心身並行論より出發して吾人が生理學的研究によつてある生理現象の因り起る諸條件を知る時は吾人はこれによつて此等生理現象と結合せるある心理現象の諸條件を決定することが出来る。主觀主義は今や唯人間相互關係を唯一の殘壘として守つてゐる。若し主觀主義にしてこゝをも孤守することが出来なかつた時に於ては、自然科學者は愈全世界は最も外部的な最も複雑な一大機制であり人間は實に唯その一部分であると見ることが出来るのである。今かゝる一大機制の各部分の合法的關係が物理化學的法則によつて決定し得ることが分つたならば此の機制の考察は自然科學者に眞理認識の大なる満足を與へるであらう。

以上がゼ氏の論述である。行論頗る明確で社會現象の生理學的研究を氏ほど徹底的に方法論的に論じたるものは恐らくあるまい。オストワルドの如き物質一元説に墮せず飽迄も純一に客觀的態度を執つて進める氏の純正自然科學としての社會生理學の主張に對しては何等の非難すべき點がない。社會學は確かにかゝる方面の研究によつて一層大なる發達を遂げることが出来るであらう。而して氏の社會生理學なるものが社會學に對して如何なる地位を占め又如何なる意味に於て承認せらるべきかは本論文の初頭に於て述べたる所であるから今こゝに繰返さない。然しながら氏が自己の本壘を出で心理學的社會學の批評を試みてゐる個處に關しては重大なる認識論的獨斷と粗笨とがある。第一は他人の意識又は精神狀態は之を認識する事が出来ないといふ一種の不可知論獨我論に於ていある。然し我等は我等の經驗を言語文章及其他の客觀化せられたる精神として表現しその傳達交通によつて互に他人の精神を理解してゐるのである。假りに一步を譲つて他人の直接經驗そのものゝ全貌を吾人は認識することは出来ないとしてもそれは社會學の成立に就いて何の關する所がない。何となれば社會學は唯心と心とが關係し又關係し得る限りのものを以つて其の對象としてゐるからである。又他人の精神の認識

は單にその身體的・外部的認識と自己觀察とを結合したる一の類推であるといふ見方に對しても今日の認識論の賛同し難き點である。然しこゝに於ても一步を譲つてこれを類推であるとするならば生理學に於て單も單純なる動物試験を基として最も複雑なる人類の生理學的研究に及さんとするこゝも亦同様に非難さるべきではあるまいか。又氏の現象と概念との區別の如きも一見如何にも明快であるが然し概念以前のものとは科學的認識の對象となることの出來ないもの主客未分のものであり科學的認識の對象となるものは既に思惟の構成によつて成るものであるとするればこゝにも猶深き認識論的考察の餘地があるであらう。然し氏が精神現象は計量的要素に還元することが出來ないといふ根據より心理學的社會學を以つて自然科學でないといつてゐるのは自然科學といふことこの概念の決定如何によつて敢て反對する必要はない。この故に所謂精神現象の科學をも普遍的法則の構成といふ點から他の計量的自然科學と同列に見てこれを自然科學なる概念中に包攝することの妥當なりや否といふことが問題となり得る。がそれは今姑く措いて問はない。然しながら社會學が普遍的法則科學たり得ずといふことは決して出來ない。唯この方面に就いては吾人の前に未拓の曠野の猶甚だ廣きを覺ゆる。これを

拓くは一に社會學者今後の任務であらう。

附言。

バザロフの反射生理學參考書に就いては本文中にも二三掲出してあるが尙

黒田源次學士「バザロフの條件反射研究法に就いて」『心理研究第十卷第一號』。

ホルデイフ教授「大腦の機制に關する新しい二法則」及び

黒田浦本學士の右に關する論文二。『日本心理學雜誌第二卷第二號』。

其他外國文獻に關しては右心理研究黒田學士論文末尾參照。